

項の共有と非顕在項の認可—心理インパクト動詞を伴う 非選択目的語結果構文

鈴 木 亨

1. 心理インパクト動詞と非選択目的語

本稿の目的は、frighten に代表される心理インパクト動詞 (verbs of psychological impact) や関連するいくつかの動詞類が用いられる構文において、非選択目的語が認可されるしくみを、Ramchand (2008) の First Phase Syntax の枠組みにおいて分析することである。

心理インパクト動詞類は、心理動詞 (psychological verbs) のなかでも、使役主 (causer) が被動作主 (patient) の心理状態に影響力を行き、一定の心理的な状態変化を含意する広義の状態変化動詞 (change of state verbs) の下位グループであり、マイナスとプラスの心理作用に応じて次のような2つのグループに分けられる。

- (1) a. マイナスの心理インパクト動詞 : frighten, scare, bore, shock, shake, strike, terrify
- b. プラスの心理インパクト動詞 : allure, bewitch, charm, entice, seduce

心理インパクト動詞は、状態変化動詞のなかでも、より厳密なアスペクトの特徴としては、行為と変化が瞬時的な事象として捉えられる一回相動詞 (semelfactive verbs) として、いわゆる程度到達動詞 (degree achievement verbs: burn, freeze, melt) とは区別される。したがって、程度到達動詞は、持続時間表現 (for X time) を伴う場合、一定方向への持続的な状態変化のプロセスを表わすが、心理インパクト動詞は、一般に瞬時的行為の複数回の繰り返しとして解釈される。また、完結時間表現 (in X time) との共起関係は、程度到達動詞の場合のみ許される。¹

- (2) a. He froze the ice cream {for/in} an hour.
- b. He frightened her {for/*in} an hour.

1 広義の状態変化動詞におけるこのような下位区分は、動詞に内在するスケールのタイプが、2点スケール (two-point scale) であるか、複合スケール (multiple-point scale) であるかという違いに対応する (Beavers (to appear), Rappaport Hovav 2008)。2点スケールは、対立する状態の瞬時的な交替を含意するのに対し、複合スケールは、方向性を持つ漸進的な程度の増減による持続的な変化を含意する。

心理インパクト動詞 が一回相動詞であることは、本来の物理的影響力の行使が心理面へ転用されたと考えられる一回相動詞として、shake や strike などいくつかの事例が存在することからも示唆される。心理インパクト動詞が使役移動構文で用いられるのも、物理的インパクトを表わす一回相動詞の用法との並行性から理解することができる。

(3) He frightened her into a corner.

ただし、心理インパクト動詞と物理インパクト動詞の違いは、結果含意の有無であり、物理インパクト動詞には一般に特定の結果含意はない。この違いは、shake や strike が、心理インパクト動詞としては動能交替 (conative alternation) ができないのに対して、物理インパクト動詞としては動能交替が可能であることによっても示される。

(4) a. He struck at me.

b. *The news struck at me.

興味深いのは、心理インパクト動詞は本来の用法では義務的動詞であるにもかかわらず、非選択目的語が生じる場合があるという事実である。この用法では多くの場合、動詞行為の影響の受け手である本来の目的語が、非選択目的語に後続する PP 内に「降格」されている。「降格」された本来の目的語のかわりに、動詞の目的語位置を占めるのは、動詞行為の結果として引き出される（発生する）ものとして解釈される非選択目的語である。これが非選択目的語であることは、後続要素のない単純他動詞構文としては有意な解釈が成立しないことから示される。つまり、心理インパクト動詞の目的語は、本来有生（一般には人間）でなければならないのである。

(5) a. *He frightened.

b. He frightened the secret out of her.

c. #He frightened the secret.

(6) a. He frightened the hiccups out of her.

b. The conductor frightened the music out of those lazy players.

c. He is good at charming money out of companies.

d. He beat the facts into those poor children.

従来の結果構文研究における非選択目的語の分析では、目的語の省略による自動詞用法が一般的な活動動詞 (activity verbs) に、結果事象を表わす小節が加わる形式のものが主たる対象とされてきたが、動詞によって義務的に要請される目的語が「降格」されるパターンについては、その成立のしくみと制約がいまだ十分に解明されたとはいえない。2節では、心理インパクト動詞と関連する他の動詞類に共通して見られる非選択目的語構文の特徴を概観する。3節では、本稿における分析の基本的枠組みとなる Ramchand (2008) の First Phase Syntax を導入し、関連動詞の基本構造を分析する。4節では、First Phase Syntax の理論において動詞の多様な構造上の具現化を可能にする 不完全連結 (underassociation) の働きを補完する2つの機能的制約として、「項の共有」と「非顕在項の認可」のしくみを提案し、心理インパクト動詞を伴う非選択目的語構文の成立について分析する。5節が全体のまとめとなる。

2. 非選択目的語結果構文

心理インパクト動詞における非選択目的語構文への拡張用法は、wipe に代表される表面接触動詞 (surface contact verbs) や break に代表される状態変化の到達動詞 (achievement verbs), さらに melt などの程度到達動詞 (degree achievement verbs) の場合と共通性が見られる。共通するパターンは、いずれも動詞は本来の目的語として働きかけの対象物をとるが、その対象物と 部分・全体 (part/whole) の関係に基づいて解釈される新たな事物が目的語位置に生じる場合には、本来の働きかけの対象物が目的語に後続する PP 内に「降格」されるという点である。

- (7) a. He wiped the crumbs off the table.
b. He wiped the table.
c. #He wiped the crumbs.
- (8) a. He kissed these questions from her lips.
b. He kissed her lips.
c. #He kissed these questions.
- (9) a. He melted the handle off the coffee pot.
b. He melted the coffee pot.
c. #He melted the handle.
- (10) a. Someone burned his family out of their house.
b. Someone burned their house.
c. #Someone burned his family.
- (11) a. She broke a leg off the table.

- b. She broke the table.
 - c. #She broke a leg.
- (12) a. She tore the buttons off her shirt.
- b. She tore her shirt.
 - c. #She tore the buttons.

本来、wipe タイプにおいては目的語の義務性は低く、特に習慣的行為が文脈で想定されるような場合には省略可能であり、また動能交替 (conative alternation) も広く観察される。それに対し、melt タイプと break タイプにおいては、目的語の存在は義務的であり、動能構文も不可能であり、この点で、frighten タイプも同様にふるまう。

- (13) a. He wiped (the table) every morning.
- b. He wiped at the table.
- (14) a. *She melted.
- b. *She melted at the coffee pot.
- (15) a. *She broke.
- b. *She broke at the table.
- (16) a. *He frightened.
- b. *He frightened at her.

このような目的語の義務性に関する対比は、アスペクトの観点からすると、表面接触動詞が結果含意のない活動動詞であるのに対して、心理インパクト動詞は、程度到達動詞や到達動詞とともに、結果含意のある広義の状態変化動詞であることが反映された特性であると考えられる。

- (17) a. He wiped the table, but nothing was different about it.
- b. #She melted the coffee pot, but nothing was different about it.
 - c. #He frightened her, but nothing was different about her.
 - d. #She broke a leg, but nothing was different about it.

時間表現 (for/in X time) を加える事象の持続性のテストにおいては、心理インパクト動詞は、break タイプと同様にふるまう。ともに完結の時間表現 (in X time) との相性がよくないが、これは、そもそも持続性のない瞬時的な到達相 (achievement)、あるいは一回相 (semelfactive) を表わすことによるものであり、例えば 'in an instance' のような極度に短

い時間表現の場合にのみ可能である。また、持続の時間表現 (for X time) を伴うことが可能なのは、心理インパクト動詞は、行為の繰り返しの解釈が成り立つ場合である。

- (18) a. He wiped the table {for/in} an hour.
 b. She melted the coffee pot {for/in} an hour.
 c. She broke the table {*for/*in} an hour.
 d. He frightened her {for/*in} an hour.

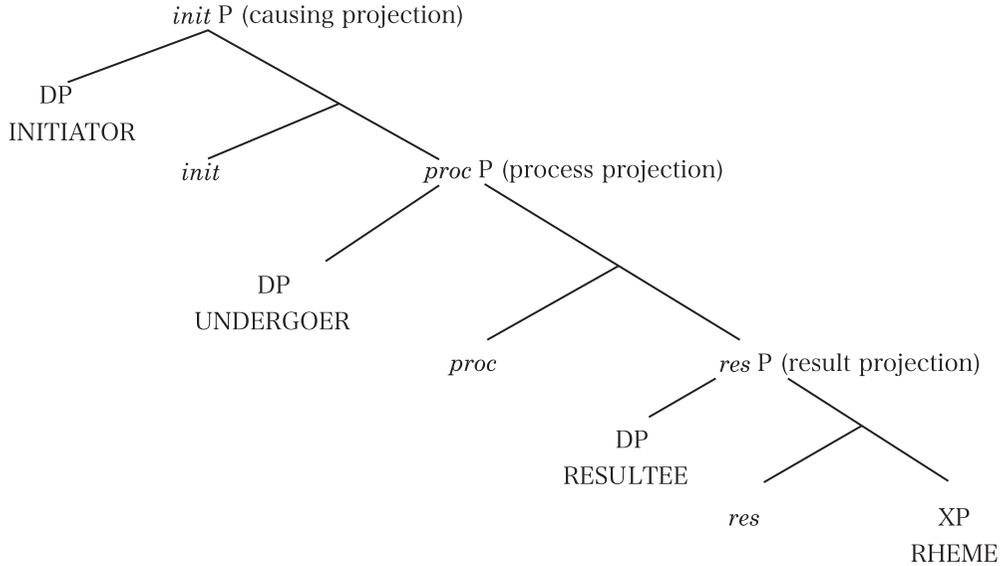
表面接触動詞が非選択目的語を伴う場合は、結果含意のない活動動詞であり、目的語も義務的ではないことから、形容詞を伴う一般的な非選択目的語結果構文 (They drank the pub dry/The neighbor's dog barked me awake) の同類として分析することができると思われるが、程度到達動詞や到達動詞、心理インパクト動詞の場合は、本来義務的なはずの目的語が構造的に「降格」されるしくみや、本来の動詞の意味特性と新たに加わる移動の意味が、どのように整合的に解釈されるのかについては、いまだ十分に明らかにされていない。次節以降では、Ramchand (2008) の First Phase Syntax を基本的な枠組みとして採用し、独自の仮説を加えながら、心理インパクト動詞の事例を中心に、これらの PP 結果句を伴う非選択目的語結果構文が成立するしくみについて考察を進める。

3. Ramchand (2008): First Phase Syntax

Ramchand (2008) の First Phase Syntax (以下 FPS) は、動詞の語彙意味と統語構造のインターフェイスとしての事象構造における一般化を捉えるシステムであり、理論的には Hale & Keyser (2003) らの統語的語彙分解アプローチの流れをくむものである。FPS では、1 つの動詞語彙項目が対応づけられる事象構造の統語表示は、(19) で示すように、最大限 3 つの下位事象、すなわち使役事象 (causing subevent)、プロセス事象 (process subevent)、結果事象 (result subevent) が組み合わされたものからなり、それぞれの下位事象は、*init* (= initiation), *proc* (=process), *res* (=result) という 3 つの機能的述語主要部の投射であるとされる。*init* は、*procP* を補部とし、その指定辞は、INITIATOR (=使役の主語) として解釈される。*proc* は、*resP* を補部とし、その指定辞は、UNDERGOER (=変化プロセスの主語) として解釈される。*res* は、RHEME (=結果の評述) として XP を補部とすることができ、その指定辞は、RESULTEE (=結果の主語) として解釈される。²

2 本稿では、FPS の表示について、原則として Ramchand (2008) の表記法を踏襲するが、以下では説明の便宜上、理論の趣旨を越えない範囲で細部を簡略化したり、部分的な構造のみを表示する場合がある。

(19)



(20) First Phase Syntax における 3 つの機能的述語主要部 (Ramchand 2008: 40)

- a. *init*P introduces the causation event and licenses the external argument (‘subject’ of cause = INITIATOR)
- b. *proc*P specifies the nature of the change or process and licenses the entity undergoing change or process (‘subject’ of process = UNDERGOER)
- c. *res*P gives the ‘telos’ or ‘result state’ of the event and licenses the entity that comes to hold the result state (‘subject’ of result = RESULTEE)³

FPS の特徴のひとつに、同一の動詞語彙項目が構造上の複数の主要部位置に挿入される (= 主要部を含む構造を同定する) ことを認めるといふ点がある。例えば、活動動詞である *wipe* は、{*init, proc*} の 2 つの述語カテゴリーを同定し、状態変化動詞である *break* は、他動詞用法の場合、{*init, proc, res*} の 3 つの述語カテゴリーを同定する。つまり、各動詞の語彙項目は、それぞれの機能的述語カテゴリーを認可するかという情報を、{*init, proc, res*} という素性の組み合わせに基づいて指定されている。FPS においては、伝統的なアスペクト分類によるクラスは、概ね次のような動詞の語彙情報の指定に対応する。⁴

3 (19) における *res* 補部の XP/RHEME (評述) は、カテゴリー指定は特になく、DP, AP, PP などが対応し、主要部述語とともにその主語 (= 指定辞) に関する叙述的特性を構成する要素として解釈される。のちに見るように、RHEME 要素は、*res* 補部だけではなく、*proc* 補部に生じる場合もある。

4 Ramchand (2008) は、自他交替のある動詞の場合は、*init* の投射を含まない自動詞用法を基本とし、派生型として上位構造に *init* が加わると考えているので、元の表記における到達動詞、一回相動詞、程度到達動詞の基本型には *init* が含まれていない。本稿では、説明の便宜上、これらの自他交替を示す動詞に関しても、他動詞用法に相当する場合に限定して考察を進める。

- (21) a. activities: [*init, proc*]
 b. accomplishments: [*init, proc*] with incremental theme or PATH
 c. achievements: [*init, proc, res*]
 d. semelfactives: [*init, proc*]/[*init, proc, res*]
 e. degree achievements: [*init, proc*] with a property-scale path

2節で見た4つの動詞グループが、FPSの枠組みにおいてどのような語彙指定を持つことになるかを簡単にまとめておこう。結果含意のない wipe タイプの表面接触動詞と、結果含意のある melt タイプの程度到達動詞は、[*init, proc*]の2つ述語投射からなる構造が与えられ、結果指定のある break タイプの到達の状態変化動詞は、[*init, proc, res*]の3つの述語投射からなる構造を同定すると分析される。さらに frighten タイプの一回相の心理インパクト動詞も、基本的に後者の break タイプと同じ構造に対応するものと考えられる。

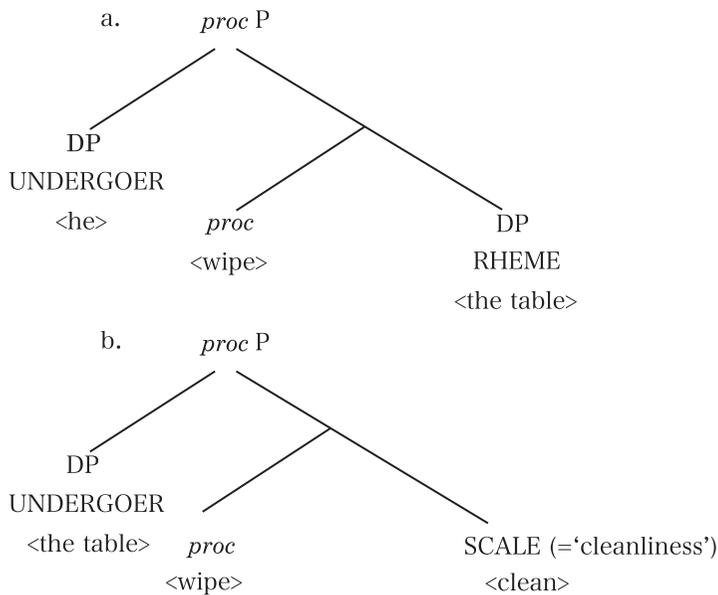
- (22) a. wipe: [*init, proc*] INITIATOR_i UNDERGOER_i
 b. melt: [*init, proc*] INITIATOR_i UNDERGOER_j
 c. break: [*init, proc, res*] INITIATOR_i UNDERGOER_j RESULTEE_j
 d. frighten: [*init, proc, res*] INITIATOR_i UNDERGOER_j RESULTEE_j

それぞれの動詞の語彙指定の右側に大文字で表記された INITIATOR, UNDERGOER, RESULTEE は、それぞれ述語主要部が指定辞として選択する項の可能性を示し、付与されるインデックスによって同一要素として解釈されるかどうかを区別している。例えば、break の他動詞用法においては、UNDERGOER と RESULTEE は、同一要素として従来の意味役割 theme に相当する解釈を受けるが、INITIATOR は、別のインデックスが与えられることにより、独立した causer として解釈されることになる。⁵ (22) の語彙指定では、一見すると、2節で見たそれぞれの動詞のアスペクト特性に関して十分な区別がなされていないように思われるかもしれない。まず、結果含意に関して、活動動詞の wipe と程度到達動詞の melt では、前者はなし、後者はありという対照的な特徴がある。Ramchand によれば、この両者は、*proc* 補部に内在的なスケール指定があるかどうかで区別される。すなわち、melt には、熱によって物質が固体から液体へと変化するいわば「融解度」のスケールが指定されているが (=24)、wipe にはそのような内在的なスケールが指定されていないので、*proc* 補部はいわば空のスロットとなり、単純他動詞構文の用法では目的語が入ることになる (=23a)。しかし、一方で活動

5 指示関係を示すインデックス表記は、概ね動詞の(百科辞書的)意味と統語構造との整合性に還元されるべき性質のものであり、FPSの表示において必須であるというわけではない(Ramchand 2008: 74)。

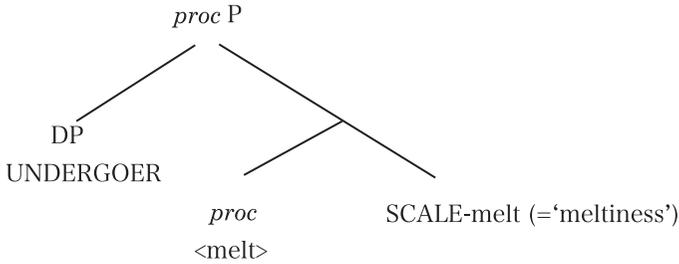
動詞はさまざまな形容詞結果句を伴い、結果構文を形成することが知られている。例えば、*He wiped the table clean* のような結果構文が可能であるが、この *clean* のような結果句が *proc* 補部に生じることで、変化の方向性を定めるスケールとして機能する場合 (=23b) には、*procP* の指定辞に生じる目的語の *the table* は、変化プロセスの主体として解釈されることになる。つまり、*wipe* タイプにおいては、語彙的に指定される固有のスケールはないが、構造的には潜在的なスケールを補完することも可能である（この場合、(22a) の UNDERGOER は、*i* ではなく *j* のインデックスを持つことになる）。

(23)



一方、固有のスケールがあらかじめ指定されている *melt* は、*She melted the ice cream soft* のような結果句を伴う例もあることにはあるが、結果句の機能は基本的に内在する「融解度」のスケールの詳述に限定され、可能な形容詞の選択の幅も狭い（同様の事例として、*He froze the ice cream solid/hard* や *She burned the toast black* がある）。なお、いわゆる 同型性制約 (the homomorphism constraint) (Krifka 1998, Wechsler 2005) は、変化プロセスを表す *proc* 主要部と、それに関するスケールとして機能する *proc* 補部とのあいだに成立する構造的な制約であると Ramchand は論じている。

(24)

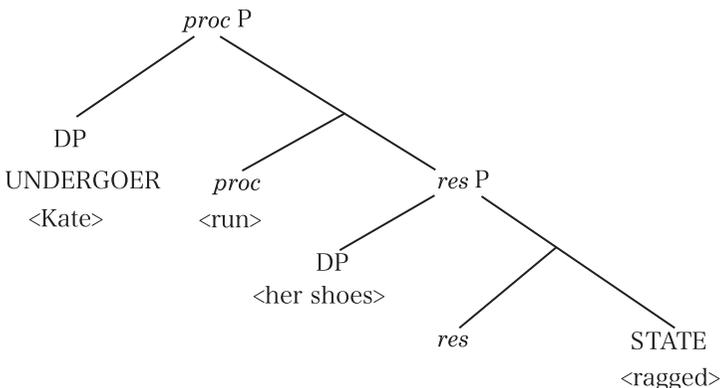


break と frighten の対比においては、frighten の方が形容詞結果句の選択肢に幅があるという事実がある。

- (25) a. She frightened me {numb/senseless/silent/speechless}.
 b. *He broke the glass {flat/ragged/useless/worthless}.

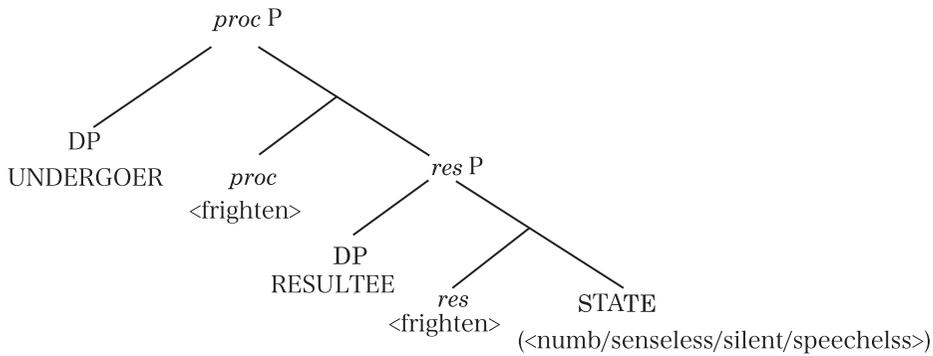
frighten と共起する結果句形容詞は、いわゆる機能不全状態を表わす形容詞 (dysfunctional adjectives: Goldberg 1995, 鈴木 2007, 2008) である。FPS では、再帰代名詞結果構文や再帰的身体部位結果構文の結果句 (26) と同様に、これらの結果句は *res* 補部の位置に生じるものとされる。*res* 補部に生じる結果句は、機能不全という境界 (bound) を明示するという意味で有界的であるが、そこに至る変化プロセスは推論によって得られるものであり、構造そのものが漸進的な程度変化を表わすわけではない。このことは、*proc* 補部に生じる結果句は、同型性制約により複合スケール上の漸進的な変化プロセスとして解釈されるのに対して、いわゆる「強い結果構文」(Washio 1997) では、必ずしも漸進的な変化の解釈が伴わないという小野 (2007) の見解にも一致する。

(26)

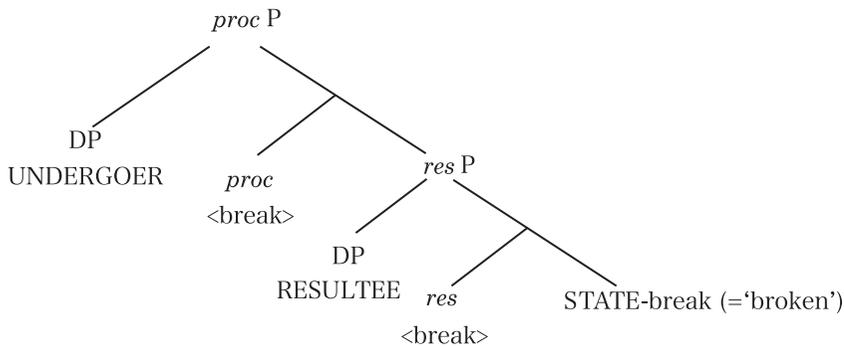


ここでは、wipe タイプと melt タイプの対比分析と並行的に、frighten の場合には、res 主要部の同定により、一定の結果状態の達成が含意されているが、具体的な状態の描写に関しては詳述の幅が残されているのに対し、break の場合には、いわば‘broken’という結果状態が語彙的に指定されていて、そこに他の形容詞が表わす状態概念をさらに重ねることはできないものとする。つまり、動詞が構造上同定する機能的な主要部の種類は同じでも、それぞれの補部（この場合は、RHEME）に関する語彙指定の強弱に応じて、さらなる下位分類が捉えられる。⁶

(27)



(28)



6 この点については、究極的にはこの2つの動詞の合成的派生 (conflation) の違いに帰する説明の可能性が考えられる。語彙の合成的派生理論 (Hale & Keyser 2003) の観点から (史的語源分析とは必ずしも一致しないが)、frighten は‘shelve’などと同様の名詞派生 (fright > frighten)、break は形容詞派生 (broken (break-en) > break) と分析することができるならば、そのカテゴリー上の対立が、補部として許容される形容詞の選択の幅に反映されると分析する可能性もあるが、この点は今後の検討課題とする。

以上の4つの動詞タイプの *proc* 補部, および *res* 補部の中身についての語彙指定 (スケール指定と結果指定) をまとめ直すと, 次のようになる。

- | | |
|---|------------------|
| (29) a. wipe: [<i>init, proc</i>] | 結果含意なし; スケール指定なし |
| b. melt: [<i>init, proc</i> (SCALE-melt)] | 結果含意なし; スケール指定あり |
| c. frighten: [<i>init, proc, res</i>] | 結果含意あり; 結果指定なし |
| d. break: [<i>init, proc, res</i> (STATE-break)] | 結果含意あり; 結果指定あり |

次節では, この4つのタイプの動詞が, FPS において非選択目的語を伴う拡張用法を獲得するにいたるしくみについて考察を進める。

4. FPS における項の共有と非顕在項の認可

FPS には, 同一動詞の項の具現化における多様性を保証するしくみとして, 不完全連結 (underassociation) というものがある。Ramchand によれば, 語彙的に指定された一部の機能主要部への当該語彙項目の連結 (=挿入) がなされずに, 空のまま残された主要部位置が別の語彙項目によって埋められることで, 複合的な述語構造を構築することができるようになっている。これにより, 自他交替を含む動詞の項の具現化における交替現象を柔軟に捉えることができる。

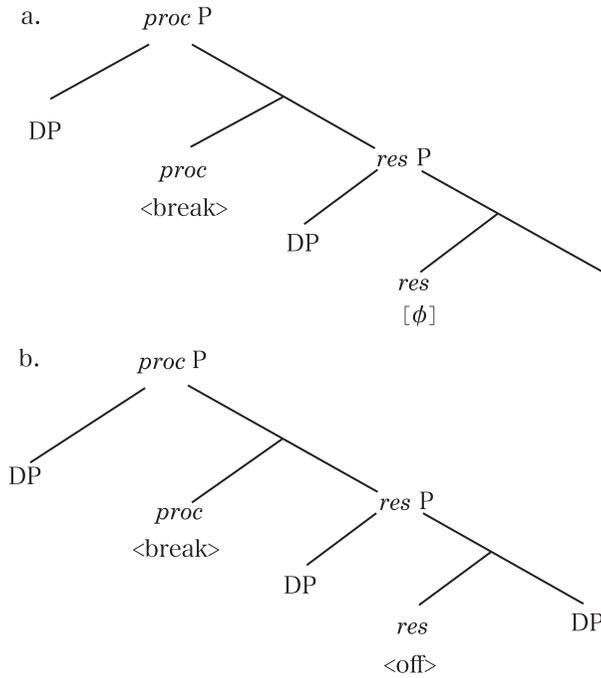
(30) Underassociation (Ramchand 2008: 98)

If a lexical item contains an underassociated category feature,

- (i) that feature must be independently identified within the phase and linked to the underassociated feature, by Agree;
- (ii) the two category features so linked must unify their lexical encyclopedic content.

例えば, 本来の語彙指定が [*init, proc, res*] である break の場合, 不完全連結 により, *res* 主要部が break によっては同定されず, 空のまま残されることが可能となる (=31a)。そこを語彙的に埋めて同定する要素として, off のような有界性前置詞が入れば, He broke a leg off the table のような非選択目的語表現ができることになる (=31b)。

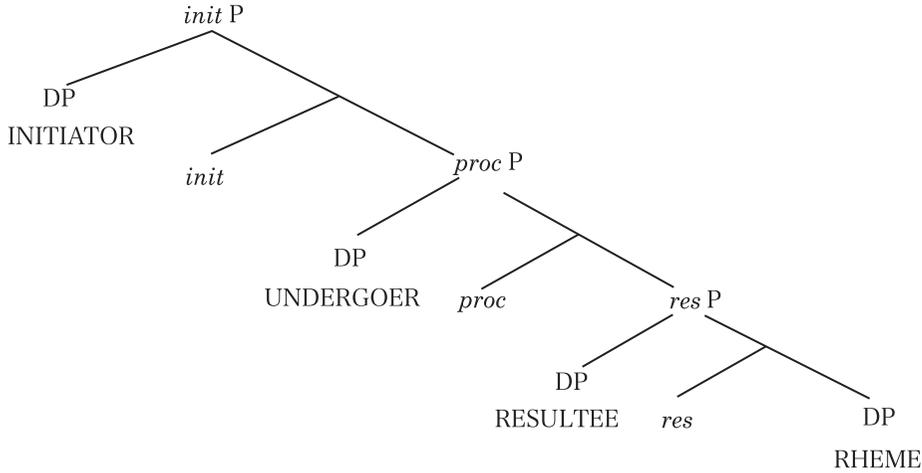
(31)



以下では、Ramchand の 不完全連結 という道具立てを採用した上で、さらに下位事象間の項の共有 (argument sharing) と非顕在項 (implicit argument) の認可に関する一定の制約を仮定することによって、非選択目的語が導入される際の下位事象間の統合のしくみを説明する。

前節までに見た 4 種類の動詞タイプは、非選択目的語を導入する場合に、FPS では最終的に (32) のような同じ構造を持つことになるが、その派生においてはそれぞれ異なる来歴を持つことになる。

(32)



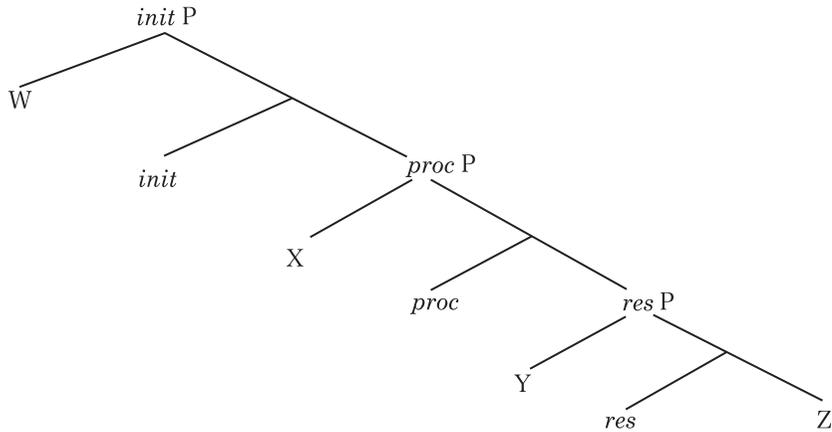
まず、wipe タイプにおいては、もともと *proc* 補部は潜在的なスケール位置であり、そこに PP として具現化する *resP* が増補 (augmentation) されることになる。melt タイプは、wipe タイプと基本的に同じ構造を同定するが、*proc* 補部として語彙的に指定されたスケールがあるので、そこに上書きするかたちで、本来のスケールが *resP* に読み替えられることになる。break タイプと frighten タイプは、どちらもまず *res* 主要部が 不完全連結 により空になり、そこに有界性前置詞 (off/out of/from/into) が代入され、補部の DP を含む投射が得られる。以上の 4 つの動詞タイプにおける非選択目的語結果構文の構築方法をまとめると、次のようになる。

- (33)
- a. wipe : *proc* 補部への *resP* の増補 (augmentation)
 - b. melt : 内在的なスケールの *resP* への読み替え
 - c. break : *res* の 不完全連結 (underassociation) と有界性前置詞 (bounded preposition) の *res* 主要部への代入
 - d. frighten : *res* の 不完全連結 (underassociation) と有界性前置詞 (bounded preposition) の *res* 主要部への代入

ここで潜在的な問題となるのが、Spec-*procP* の位置を占める各 DP 間の解釈関係である。

(34) では、(32) の構造に含まれる DP を {W, X, Y, Z} の記号で示している。

(34)



4つのDPのうちW, X, Yの3つは、それぞれ *init*, *proc*, *res* の項 (INITIATOR, UNDERGOER, RESULTEE) として生じるDPであり、Zのみが *res* の補部として生じ、「結果の評述 (RHEME of 'result')」として機能する。WからZまでの指示関係の組み合わせは原則として自由に選択されるべきものである。

2節でも見たように、wipeタイプの活動動詞の場合は、*resP*がない場合でも、INITIATOR (Spec-*initP*) のWとUNDERGOER (Spec-*procP*) のXが同一指示である場合と、そうでない場合が考えられる。同一指示であれば、目的語がプロセスの評述として行為の進行する範囲を表わし (He wiped the table halfway), 非同指示であれば、結果句による潜在的なスケール解釈を含む構造として機能する (He wiped the table clean)。さらに、同一指示 (W = X) でありながら、*procP* の補部として、目的語ではなく、*resP* が増補される場合には、強意の機能不全結果構文の読みに対応することになる。

(35) He wiped his fingers {sore/off (his body)}.

一般に、機能不全結果句 (機能不全形容詞だけではなく、身体部位の分離を表すPPも含む) を伴う強意の結果構文においては、INITIATORとUNDERGOERが同一指示になることで上位の行為プロセスの主体が焦点化され、下位の結果事象とのあいだの項の共有はなく、それゆえ逆説的に、行為の過剰な強度に基づく使役因果関係の読みが喚起され、機能不全結果句の慣用的解釈を含む文脈情報によって支えられなくてはならない。

さらに、fightenタイプの動詞においても、WとXの同一指示が成り立つ場合は、機能不全形容詞結果句 (36a) や禁忌語 (taboo term) (36b) を含む強意表現に相当すると考えら

れる。

- (36) a. They frightened me {numb/silent/shitless}.
 b. They frightened the hell out of me.

Hoeksema & Napoli (2008) によると、(36b) のような構文イディオム的な表現は、悪霊にとりつかれた人から悪霊を追い抜くというような、「悪魔祓い (exorcism)」の描写にその起源があるとされているが、現代英語では禁忌語 (the hell, the devil, the shit など) 本来の意味は漂白され、PP 内の名詞句を実質的な目的語とする動詞行為の程度を強調する表現として、口語で多用されている。

次に、 $X = Y$ となる場合は、UNDERGOER と RESULTEE が複合的に従来の意味役割 *theme* に対応し、次のような典型的使役移動構文の事例に当てはまると考えられる。

- (37) a. He wiped the crumbs off the table.
 b. He melted honey into his coffee.
 c. She broke an egg into the bowl.
 d. He frightened her into a corner.

(37a) のような *wipe* タイプの動詞においては、上で見たように *procP* 補部は潜在的に開放されているスケール位置なので、*resP* の増補の障害となる要因は何もない。したがって、このパターンは非常に生産的で、多くの表面接触動詞に関して辞書にも記載される定着度の高い用法となっている。それに比べ、(37b) のような *melt* タイプの程度到達動詞の場合には、*resP* を構造上増補する際に、語彙に内在するスケールが *resP* として読み替えられる必要があるので、その負担が理論上どう計算されるかはさておき、一般性は *wipe* タイプに比べて限定的であると考えられる。一方、(37c-d) は、FPS の派生においては 不完全連結 の適用が必要ではあるが、UNDERGOER と RESULTEE の合成的な解釈における変化主体を担う DP は、いわゆる非選択目的語ではないので、それなりの一般性が認められるものと考えられる。

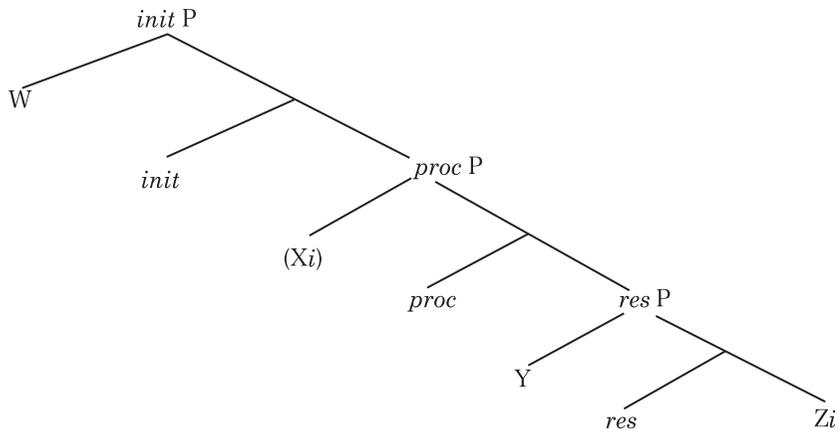
では、 W と X と Y が、それぞれ離接関係 [W X X Y , W Y] にあるような可能性は許されるだろうか。FPS の枠組みでは、一般的に W , X , Y の 3 つの項が存在する場合に、それ

7 FPS の後の統語派生の段階では、少なくとも機能的述語範疇の *init* と *proc* (場合によっては *res* も) が構造上統合されることになるので、項位置の潜在的な競合は、正確には格付与とは独立に、その統合操作と連動する問題と考えるべきかもしれない。なお、ここでは議論の複雑化を避けるため、二重目的語構文の分析については保留する。FPS における二重目的語構文についての暫定的な分析については、Ramchand (2008: 100-105) を参照。

ぞれ主格と対格という構造格の付与される主語と目的語という2つの統語構造上の位置をめぐって潜在的な競合関係が存在する。⁷ その競合が原理的に解消される1つのケースが、 $W = X$ となる活動動詞の典型的な用法であり、もう1つが、 $X = Y$ の関係で、目的語が変化主体と解釈される状態変化/使役移動の事象を表すケースである。これら2つの場合は、いわば1つの語彙項目が構造上の2つの項(位置)を共有することで、事象構造と統語構造のインターフェイスであるFPSにおける項の数(=3)と、構造格が認可される位置の数(=2)における対応の不一致をなくすための解決策であるともいえる。

さらにもう1つの可能性として、 $[W \ X, X \ Y, W \ Y]$ の関係のまま、適正なFPSの構造を認可する方策があることを提案する。すでに指摘したように、非選択目的語構文においては、動詞本来の意味上の目的語が、PP内に「降格」されるという特徴がある。ここで「降格」というのは、あくまでも比喻であり、FPSの枠組みに従えば、DPの自由な連結の結果、 X が、 W と Y の両者とは離接関係にあるが、*resP*補部の Z とのみ同一指示の解釈を持つ場合である。ここで問題となるのは、 X が Y よりも構造上上位にあるにもかかわらず、動詞の目的語位置に具現化することはなく、PP内にもみ現れるという点である。本稿の提案は、本来は構造上具現化されるべき X が、*resP*補部に位置する Z (=結果の評述)との同定関係(identity)に基づき、非顕在項(implicit argument)としての資格を得て、統語構造における具現化に関して W や Y との競合関係から除外されるというものである。その結果、上位の W が主語となり、下位の Y が動詞の目的語として具現化されることになる。

(38)



なお、 Z がある種の項としての性質を持つことは、次のような‘What someone did to X’のテストの結果によって示唆される。

- (39) a. What she did to the table was wipe the crumbs off (it).
b. What she did to the coffee pot was melt the handle off (it).
c. What he did to her was frighten the hiccups out of her.
d. What he did to the table was break a leg off (it).

一方、Zの構造上の卓立性が低く、完全な項ではないということは、これらを受身形の主語にすることが不適切であるという事実によって示される。

- (40) a. He scared the secret out of her.
b. The secret was scared out of her.
c. *She was scared the secret out.
- (41) a. He frightened the hiccups out of her.
b. The hiccups were frightened out of her.
c. *She was frightened the hiccups out.
- (42) a. He melted the handle off the coffee pot.
b. The handle was melted off the coffee pot.
c. *The coffee pot was melted the handle off.
- (43) a. Someone burned them out of their house.
b. They were burned out of their house.
c. *Their house was burned them out.
- (44) a. They froze her out of the conversation.
b. She was frozen out of the conversation
c. *The conversation was frozen her out.

ここでの提案をまとめると、FPSの枠組みでは、[*init, proc, res*]の3つの主要部が投射を重ねる完全な構造 (full-fledged structure) において、それぞれの指定辞に当たる W, X, Y の3つの項は、主格と対格という2つの構造格が付与される位置をめぐって潜在的に競合する関係にあるが、その競合関係を解消する方策として、X項 (UNDERGOER) に関して、(1) $W = X$ 、もしくは $X = Y$ という同定関係に基づく下位事象間の項の共有 (argument sharing) と、(2) *resP* 補部内の RHEME 項である Z との同定関係に基づく X 項の非顕在項化、という二通りの認可方法があるということになる。

さらに、後者の RHEME 項との同定関係に基づく X 項の非顕在項化を認めることにより、非選択目的語結果構文において、なぜ結果句としては AP ではなく、PP が選ばれるのかとい

う問題に一定の答えを与えることができる。つまり、通常の AP では、X 項と同定関係を持つ DP を内部に含むことができないからである。

- (45) *The bears frightened the campground {empty/silent}.
 cf. The bears frightened the hikers out of the campground.

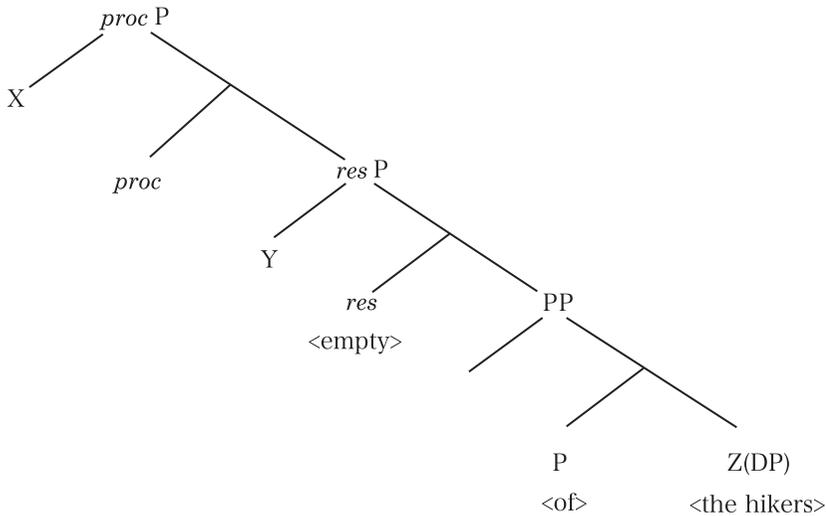
この場合、DP を補部として内部に含む PP 結果句であっても、動詞本来の目的語 (X 項 = UNDERGOER) として解釈できない場合には、適切な表現とはならない。このことは、動詞にとっての真の UNDERGOER が概念上復元可能である必要性を示唆しており、非顕在項の存在を動機づけている。

- (46) *He frightened the secret out of the safe.
 cf. #He frightened the safe.

ちなみに、一部の形容詞は補部として PP を伴うこともできるが、この構文では、Z に相当する DP の構造上の埋め込みは、*res* 自体に P が挿入され、DP が補部となる通常非選択目的語構文の場合に比べ、(48) のように構造上一段階深くなることにより、構造的にも X 項との距離が相対的に遠くなり、同定が阻まれるのではないかと考えられる。

- (47) *The bears frightened the campground empty of the hikers.

(48)



最後に、この構文において、非選択目的語と本来の意味上の目的語が、なぜ部分と全体 (part/whole) に対応するのかという点に触れておく。この構文で典型的に用いられる動詞類は、インパクトの強弱はあれど、基本的に事物 (DP₁) への力の行使を意味するものであり、*resP* の増補により新たな DP₂ が導入される場合に、DP₁ を保持したまま DP₂ との間に成立しうる最も自然な動的事象の解釈は、直接の力の行使を受ける DP₁ とその移動先としての DP₂ というシナリオと、力の行使を受ける DP₁ からその一部である DP₂ が「分離」するというシナリオであろう。前者は、選択目的語の使役移動構文という一般的な表現形式に対応し、後者が本稿で取り上げた PP を伴う非選択目的語結果構文となる。「分離変化」のシナリオにおいては、必然的に部分 は 全体 よりも小さいので、2 項述語である P によって、DP₂ と DP₁ はそれぞれ図 (figure) と地 (ground) の関係に写像されることになる。このように、FPS において UNDERGOER が「結果の評述 (RHEME of 'result')」と同定されるのは、動詞行為の本来の受け手が、そのインパクトによって部分と全体に読み換えられる、「分離変化」のシナリオが喚起されることによるものと考えられ、部分 (=非選択目的語) が 全体 (=本来の目的語) から除去されたり、引き出されたりする解釈となるのは、「分離変化」という概念の自然な帰結であるといえる。関連して、心理インパクト動詞の非選択目的語結果構文における使用は、4 節でも少し触れたように「悪魔祓い」のイメージにその起源があり、目的語位置の禁忌語の意味が漂白されると並行して、目的語位置を非選択目的語用のスロットとする構文イディオムが確立され、動詞の選択肢も増えてきたものと考えられる (大室 (2005) 参照)。

5. まとめ

本稿では、Ramchand (2008) の FPS の枠組みで、心理インパクト動詞を中心に、4 つのタイプの動詞が非選択目的語結果構文で用いられる際に要請される文法のしくみについて考察した。具体的には、*proc* 主要部の補部として *resP* が増補される際に、Ramchand の提案する「不完全連結」による語彙情報の変更に加えて、下位事象間の項の共有と、*resP* 内の DP による同定関係による非顕在項 (Spec-*procP*) の認可が、非選択目的語結果構文の成立にとって不可欠な役割をはたすことを論じた。

謝辞 本稿をまとめるにあたって、同僚の富澤直人氏、大学院生の平野沢果氏との議論がたいへん有益であったことをここに記し、感謝する。同僚のマーク・アーウィン氏には、インフォーマントとして協力していただいたことを感謝する。本研究は、科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 課題番号 21520499) の助成を受けた研究成果の一部をまとめたものである。

参 考 文 献

- Beavers, John (to appear) "On Affectedness," *Natural Language and Linguistic Theory*.
- Broccias, Cristiano (2007) "Unsubcategorized Objects in English Resultative Constructions," *On Interpreting Construction Schemas from Action and Motion to Transitivity and Causality*, ed. by Delbecque, Nicole and Bert Cornillie, 103-124, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Hale, Ken and Samuel J. Keyser (2003) *Prolegomenon to a Theory of Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Hoeksema, Jack and Donna Jo Napoli (2008) "Just for the Hell of it: A Comparison of Two Taboo-term Constructions," *Journal of Linguistics* 44, 347-378.
- Krifka, Manfred (1998) "The Origin of Telicity," *Events and Grammar*, ed. by Susan Rothstein, 197-235, Kluwer, Dordrecht.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, University of Chicago Press, Chicago.
- McIntyre, Andrew (2004) "Event Paths, Conflation, Argument Structure, and VP Shells," *Linguistics* 42 (3), 523-571.
- 小野尚之 (2007) 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」, 小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』, 67-101, ひつじ書房.
- 大室剛志 (2006) 「構文イディオム you scared the living daylight out of me について」, 田中実・神崎高明 (編) 『英語語法文法研究の新展開』, 77-83, 英宝社.
- Ramchand, Gillian (2008) *Verb Meaning and the Lexicon: A First Phase Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rappaport Hovav, Malka (2008) "Lexicalized Meaning and the Internal Temporal Structure of Events," *Theoretical and Crosslinguistic Approaches to the Semantics of Aspect*, ed. by Susan Rothstein, 13-42, John Benjamins, Amsterdam.
- Rothstein, Susan (2004) *Structuring Events: A Study in the Semantics of Aspect*, Blackwell.
- 鈴木亨 (2007) 「結果構文の有界性を再考する」, 『結果構文研究の新視点』, 小野尚之 (編), 103-141, ひつじ書房.
- 鈴木亨 (2008) 「結果構文の半生産性と創造性のありか」, 『言語研究の現在』, 金子義明 他

(編) , 387-396, 開拓社

Washio, Ryu-ichi (1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation,"
Journal of East Asian Linguistics 6, 1-49.

Wechsler, Stephen (2005) "Resultatives under the 'Event-argument Homomorphism'
Model of Telicity," *The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual
Interpretation*, ed. by Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport, 255-273, Oxford
University Press, Oxford.

Argument Sharing and Licensing of Implicit Arguments: The Unselected Object Resultative Construction with Verbs of Psychological Impact

Toru SUZUKI

This paper examines the problem of constructing the so-called unselected object resultative construction with verbs of psychological impact in English at the syntax and semantics interface. It has been shown that within the framework of the First Phase Syntax, as proposed by Ramchand (2008), apparent anomalies in the unselected object construction with certain related classes of verbs including verbs of surface contact and achievement verbs are given a systematic analysis. I argue that 'argument sharing' among arguments in specifier positions and licensing of implicit arguments via identification with RHEME of 'result' are two regulating factors for properly characterizing the construction in question.